

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2009年度～2012年度

課題番号：21251013

研究課題名（和文） ロシア極東森林地帯における文化の環境適応

研究課題名（英文） Cultural adaptation in the forest areas in the Russian Far East

研究代表者

佐々木 史郎（SASAKI SHIRO）

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・教授

研究者番号：70178648

研究成果の概要（和文）：日本海をはさんで対岸に位置するロシア連邦極東地域は豊かな森に恵まれている。この研究プロジェクトでは、その中ではぐくまれた人々の独特の文化を、自然環境への適応と、人が歴史的に創り出した政治的・経済的な環境への適応という2つの側面から調査・分析を行った。その結果、自然と文化は相互に柔軟に適応しあうが、政治的・経済的な環境と文化との関係はより直接的、密着的で、拘束力が強い反面、同時に硬直してもろいものであることが判明した。

研究成果の概要（英文）：The Russian Far East, which is located in the opposite side of the Sea of Japan, is rich in forest. In this research project, we researched and analyzed the culture that has been grown in this area from two sides of adaptation; one was the adaptation to the natural environment and the other was that to political and economic environment, which was historically created by human activities. As a result, we could show that the relation between culture and political-economic environment was more intimate, direct, and restrained than that between culture and nature and that, at the same time, it is more fragile and less flexible.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	7,000,000	2,100,000	9,100,000
2010年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
2011年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2012年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
年度			
総計	24,300,000	7,290,000	31,590,000

研究分野：人文学 C

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化、環境、適応、森林、先住民族、移民、ロシア連邦、極東地域

1. 研究開始当初の背景

本研究では、基本的に「文化」を所与の環境に対する適応のための手段と結果であるという立場にたつ。つまり、かつて新進化主義人類学の影響を受けた考古学者 B. J. メッガースがいうように、人類は文化を媒介として周囲の環境と適応関係を保つとともに、そ

の関係から様々な文化（もの、現象、行為など）を生み出す。本研究では手段であり、結果・成果でもある文化を通して、環境に対する適応関係を見るという方法を採用する。その際、「周囲の環境」として、自然界が作り出す「自然環境」だけでなく、長年の人間の政治的・経済的な活動や関係によって人為的

に生み出される「歴史的環境」も適応関係を結ぶべき環境の一つとして加える。いいかえれば、調査対象地域の文化が自然的要因と歴史的要因という2種類の変数群とどのような関係をもつのかをみていく。本研究では、それを極東ロシア南部の森林地帯を調査対象として行う。

この地域を調査対象に選んだのは、人々を取り巻く環境に顕著な特徴が見られるからである。この地域の人々は動植物資源が豊かな森に覆われた自然環境に囲まれている。それは冬にはマイナス30度を超す極寒となるが、それでも河川、森林には食用や生活資材として使える動植物にあふれている。しかし、「歴史的環境」は厳しかった。この地域の歴史的環境を決定つけてきたのは巨大な政治経済パワーを持つ中国だったが、近代以降は帝政ロシアがこの地域を併呑し、それ以来、帝国主義的な帝政ロシア、社会主義のソ連、そして新自由主義を採用したロシア連邦と100年余りの間にめまぐるしく支配者の政治経済形態が変化した。人々は豊かな自然環境に恵まれながらも、厳しい歴史的環境の中を生き抜く必要があり、彼らの文化にはそれらに対する適応過程が顕著に見られる。

2. 研究の目的

本研究は、極東ロシア南部の冷温帯及び亜寒帯森林地帯に暮らす人々の文化の特性を環境適応という観点から明らかにすることを目的としている。しかも、その適応すべき環境には、自然環境だけでなく、政治経済的な要因によって歴史的に形成される人為的な環境（「歴史的環境」と名付けておく）をも含めることにする。いいかえれば、ある地域の文化と所与の自然環境・歴史的環境との間にどのような相互作用が見られるのかを明らかにする。そのために、本研究では調査、分析方法として文化人類学と民族考古学を柱に、生態学人類学、歴史学、民俗学、さらに部分的に環境学の手法を援用する。また、従来の文化人類学や民族考古学では古くから暮らすとされる先住民族に焦点を当てがちだったが、本研究では調査対象を先住民族に限らず、ヨーロッパロシアなどから移住してきた移民の社会にも広げる。現状では先住民族と移民が隣接・共存する村が多く、彼らが協力して所与の環境に適応しようとする現実を的確に捉えるためである。

主要な調査地点は、ロシア連邦のサハ共和国の森林地帯、ハバロフスク地方のアムール川支流のクル・ウルミ川流域とゴリン川流域、さらに沿海地方南部である。サハ共和国南部からイルクーツク州北部には先住民族エヴェンキが森林地帯でトナカイを飼育しながら狩猟業と漁業に従事する生活をしており（トナカイ飼育地域）、クル・ウルミ川流域

とゴリン川流域には先住民族ナーナイの一派が漁業と狩猟業と菜園経営、林業に依拠した暮らしをしている（狩猟漁業卓越地域）。また、アムグニ川流域と沿海地方南部にはヨーロッパロシアやシベリアから移り住んできたロシア古儀式派（17世紀にロシア正教会で起きた宗教改革に反対する人々）が少なからず入り込んでおり、先住民たちが作り上げた環境を改編しつつ、農業と牧林業、畜産業を主体として、補足的に狩猟と漁業を行う生活をしている（農業開発地域）。

それぞれの地域には独特の自然環境と歴史的に形成された人為的な環境とがあり、それに適した独自の文化が発達したが、これらの地域の比較を通じて、自然環境と歴史的環境が人々の生活、文化、社会にどのように作用するのかを考察し、帰納的な方法で理論化を試みた。

3. 研究の方法

本研究では当初の研究目的を達成するために、人類学、民族学、民俗学、考古学、経済学などを専攻する研究者を組織して、実地調査と国内の研究会、国際研究集会を行った。研究組織は研究代表者と7人の連携研究者、4人の研究協力者、それにロシア側7人、中国側3人の外国人研究協力者で構成された。この総勢22人のチームが地域と季節、そして課題を分担して調査を行った。調査範囲はロシア連邦沿海地方とハバロフスク地方南部を中心として、関連諸地域、比較対象地域として、サハ共和国南部、トゥヴァ共和国東部、中国黒竜江省、そしてアメリカ合衆国アラスカ州、オレゴン州に及んだ。

国内研究会は2回、国際研究集会も2回実施した。

（1）実地調査

平成21年度

①8月15日～9月15日 連携研究者（伊賀上）とロシア側研究協力者1名（アルグジャエヴァ）の2名が、ロシア連邦ハバロフスク地方ベリョーゾヴィ村、タヴリンカ村、グシヨーフカ村で、ここに暮らすロシア人古儀式派の調査を行い。その来歴と生業形態、各種儀礼などを調べた。

②8月17日～31日 研究代表、連携研究者2名、ロシア側研究協力者2名の計5名がロシア連邦ハバロフスク地方ウリカ・ナツィオナーリノエ村で村の基本情報と生業暦に関する聞き取りと、狩猟漁労の実態調査を実施した。

③10月2日～12日 研究代表者、連携研究者、研究協力者、ロシア側研究協力者の計4名がロシア連邦ハバロフスク地方コンドン村で旧村落の立地条件と先史時代の堅穴住居址の立地条件の比較を行った。

④11月24日～30日 研究協力者1名が、ロシア連邦沿海地方南部ウラジオストーク市近郊の木材加工工場とウラジオストーク市内のシジミ(貝類)漁獲・輸出企業を訪問し、聞き取り調査および資料収集を実施した。

平成22年度

- ①6月17日～18日 研究代表者がウラジオストークにて当年度の調査についてロシア側研究協力者と打ち合わせを行った。
- ②7月30日～8月11日 研究代表者、連携研究者1名とロシア側研究協力者2名が、ロシア連邦ハバロフスク地方ウリカ・ナツィオナーリノエ村とコンドン村にて、食文化と生業に関する調査を実施した。
- ③9月6日～20日 連携研究者2名、研究協力者1名、ロシア側研究協力者2名が、ロシア連邦ハバロフスク地方南部と沿海地方北部において、ツングースカ川流域とビキン川、イマン川流域における新石器時代以後の考古遺跡の立地条件の調査を実施した。
- ④8月20日～9月11日 連携研究者1名とロシア側研究協力者2名が、アメリカ合衆国アラスカ州とオレゴン州にてロシア人古儀式派教徒の来歴、生業形態、宗教実践についての調査を実施した。
- ⑤8月 連携研究者がサハ共和国南部において、トナカイ飼育と狩猟活動の実態調査を実施した。
- ⑥1月 アメリカで公開されている1960年代、70年代の衛星写真(コロナ衛星写真)のうち、実地調査地であるウリカ・ナツィオナーリノエ村とコンドン村の周辺の写真を購入した
- ⑦2月10日～12日 研究協力者が、ロシアへの柑橘類の輸出やロシア極東からの火力発電用石炭を輸入を検討している熊本県の業者およびJETRO関係者等と懇談し、今後の沿海地方への投資に関する聞き取り調査を実施した

平成23年度

- ①5月31日～6月4日 研究代表者がウラジオストークにてロシア側研究協力者と当年度の調査の事前打ち合わせを行い、周囲の遺跡調査をした。
- ②8月12日～24日 研究代表者、連携研究者、研究協力者、ロシア側研究協力者の計4名が、ロシア連邦ハバロフスク地方ウリカ・ナツィオナーリノエ村とコンドン村のソ連時代以来の土地利用と食材調達方法、そして伝統料理の調理方法に関する調査を実施した。
- ③8月24日～31日 研究代表者、研究協力者2名、ロシア側研究協力者3名の計6名が沿海地方南部の新石器、渤海、女真、東夏の各時代の遺構調査を実施した。
- ④9月1日～3日 研究代表者、連携研究者、

ロシア側研究協力者2名の計4名が中国黒竜江省哈爾濱市において、女真時代の遺構の調査と満族(満洲)の住居調査を実施した。

⑤9月4日～9月10日 連携研究者2名、研究協力者1名、ロシア側研究協力者2名、中国側研究協力者3名の計8名が、中国黒竜江省東部の少数民族赫哲族(ロシア側のナーナイに相当する民族)の村落調査を実施した。

⑥2月19日～3月4日 連携研究者2名とロシア側研究協力者の計3名が、ロシア連邦ハバロフスク地方ウリカ・ナツィオナーリノエ村とコンドン村にて先住民族のナーナイの狩猟活動の実態調査を実施した。

平成24年度

①5月12日～17日 研究代表者がウラジオストークにおいてロシア側研究協力者と当年度の調査の事前打ち合わせを行い、同時にウスリースク市にある女真、東夏時代の遺構の追加調査を行った。

②8月1日～12日 研究代表者が、ロシア連邦トゥヴァ共和国トジャ地区にて、トナカイ飼育の調査を行った。

③9月9日～19日 研究代表者、連携研究者2名、ロシア側研究協力者3名、中国側研究協力者2名の計8名が、中国黒竜江省東部にて赫哲族の村落調査を実施した。

④9月19日～21日 連携研究者1名が中国内蒙古自治区呼倫貝爾市鄂温克族自治旗にて食文化の調査を実施した。

⑤11月29日～12月9日 研究代表者、連携研究者、ロシア側研究協力者の計3名が、ロシア連邦ハバロフスク地方コンドン村にて、先住民族ナーナイの氷下漁と狩猟活動の実態調査を実施した。

(2) 国内研究会

調査研究方針の策定と、中間報告ということで、平成21年度の初めと平成22年度の末に国内での研究会を実施した。

平成21年度

平成21年7月19日に東京大学(本郷)法文1号館310号室にて実施。研究代表者と連携研究者計7人が集まった。本調査研究プロジェクトの開始に当たり、研究代表者がこのプロジェクトの概要を説明し、連携研究者が森林適応のモデル化と現代の森林開発に関する報告を行い、さらに全体の調査研究方針が策定された。

平成22年度

平成23年2月18日、19日の2日間にわたって、山形県かみのやま温泉月岡ホテル会議室にて実施。研究代表者、連携研究者、研究協力者計8人が集まり、平成21年度、22年度の2年間の調査研究成果の共有と、今後

の2年間の調査方針の策定がなされた

(3) 国際研究集会

ロシア側の研究協力者を交えて、本プロジェクトの調査研究に関する意見交換と成果の国際的発信のために、平成21年度末と平成24年度末に実施した。

平成21年度

平成22年3月22日～24日の日程で国立民族学博物館で実施した。タイトルは、Japanese-Russian Joint Research Project “Cultural Adaptation in the Forest Areas in the Russian Far East”。日ロ双方から10人の研究者が集まり、研究報告を行い、と今後の調査研究の方針を決定した。

平成24年度

平成25年3月6日～7日の日程で、ロシア連邦立極東大学(6日)とロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所(7日)において実施した。タイトルは、Russo-Japanese Collaborative Symposium, “Cultural Adaptation of the People in the Forest Areas in Northeast Asia”。ここではこの研究プロジェクトに参加した日ロ計18人の研究者が研究報告を行った。この会議は極東大学の学生、研究所の研究員に公開された。

4. 研究成果

以上のような調査研究活動の結果、以下のような成果を得ることができた。

(1) 居住地の立地について

①今回のプロジェクトで踏査した先史時代(～3世紀)、歴史時代前半(3世紀～13世紀)、歴史時代後半から民族誌時代(13世紀～20世紀)の各時代の遺跡の住居址の分布から、ロシア極東地域南部(ハバロフスク地方南部と沿海地方)では、比較的高い土地から川岸ぎりぎりの土地へ移動する傾向、そして13世紀以後の遺跡の発見頻度が急激に低下する傾向が見られた。それには、アクセスする資源の変化、堅穴住居から平地式住居への転換、人の移動頻度の激増、物流の活性化、国家の影響などが関係している。

②そのような場所に見られる特徴として、川岸の近くで、ナラ林が形成されている点を上げることができる。それはナラの特性とともに、かつてドングリを食用にし、材を燃料や道具類に使用したことで、人々にとって有用性の高い樹種だったことも関係するだろう。

③近年の地球温暖化に伴う一時的な降水量の増加と水位上昇によって、かつては冠水しなかったような場所でも冠水し始めている。歴史的な経験が現代の居住地選択には通用

しなくなっていることも新たな発見だった。

(2) 現代の村の構造

①村落の立地条件は地形や気候、基本的な生業や住民が有する文化などによって異なるはずだが、社会主義時代先住民族の村落にも新しい移民の村落にも、画一化された構造(丸太あるいは角材積み上げ式のログハウス)の家屋が建ち並び、街路が設置され、役場や学校、診療所など共通の公共施設が整備されて、似たような概観を呈するようになった。

②しかし、古儀式派の村には礼拝堂があり、先住民の村には聖地を拜する場所が設けられるなど特色は見られる。

③社会主義体制崩壊後は民主化が図られたが、村単位の多様性が拡大し、ロシア系移民と先住民族ではその社会構造と人々の生活文化に差異が表れるようになっている。

(3) 生業と食材・生活材の獲得

①生業と食材、生活材の獲得は政治経済情勢に大きく影響される。極東の古儀式派教徒の村落でも先住民族の村落でも、農村特有の現象だが、食料の自給率は高い。ともに屋敷地内の菜園で作られるジャガイモ、キャベツ、タマネギ、キュウリ、ナス、スイカ、メロン、ベリー類などをはじめとする根菜、野菜、果実をベースとして、そこに自宅で飼育する乳牛の乳製品、あるいは豚や肉牛、鶏から得られる肉・卵製品、さらに狩猟や漁撈で得られる肉や魚を加える点で共通する。

②古儀式派教徒はロシアでも最も伝統的な食生活を続けてきたが、本来全く異なる文化を有していたはずの先住民族も、ソ連時代の教育によって完全にロシア風の食生活に変わっている。ただし、この地域では魚料理が発達していて、新鮮な魚肉を生で、あるいは半解凍して千切りにした料理は、今や極東ではロシア人の間でも食されている。

(3) 開発政策と地域産業について

旧ソ連は戦争や冷戦の影響もあり、中国系、朝鮮系の移民を排除して、ヨーロッパロシアからの移民と先住民族だけで農業開発、鉱工業開発を進めようとした。それは我々が収集した1960年代、70年代のコロナ衛星写真に如実に表れる。

①1950～70年代にはウリカ・ナツィオナーリノエ村のとなりでできたウリカ・パヴロフカのような開拓村では巨大な農場が開かれて、穀類、豆類、ジャガイモ、野菜、果実などが栽培された。ウリカ・ナツィオナーリノエ村でもナーナイたちが村の周囲に大規模なジャガイモ畑を開いた。コンドン村でも、村の周囲に広大なジャガイモ畑や野菜畑が開かれ、林業も奨励された。

②しかし、開拓村、あるいは先住民族の農場はすでに 1970 年代半ば過ぎには機能不全に陥り、開拓村の解体が始まっていた。

③ソ連崩壊前に開拓村落は人の流出を留められずに消滅し、先住民村落でも大規模農場は閉鎖されて、農業は各世帯がもつ屋敷地内の家庭菜園での自給的なものだけとなった。ウリカ、コンドン両先住民村落とも、かつての農場は森や草原に戻っている。

(4) 環境と文化について

最後に本プロジェクト研究成果をまとめて、理論的に以下のような点を指摘しておきたい。

①人間の文化は自然環境に対しては柔軟に対応することが見て取れる。自然環境への適応だけを見れば、ロシア極東地域の森林地帯は、生産形態、文化ともかなりの幅の柔軟性が許容された。

②それに対して、政治経済的な環境（歴史的な環境）は、人々の生産形態から世界観まで拘束する。しかし、強制力、影響力が強いものの、それに適応するように形成された文化は、政治経済情勢の変動に非常に敏感で、脆い。

(5) 今後の展開に向けて

4 年間の調査研究から今後発展しそうな課題を列挙しておく。

①ロシア極東地域の森林地帯における遺跡として残る住居址、集落址の特性。

②かつて佐々木高明氏が日本文化の多重構造論で提唱した北方系の「ナラ林文化」と、この地方の先史時代、歴史時代、民族誌時代の文化との関係。

③気候変動と社会との歴史的、現代的問題。

④リモートセンシングと歴史科学との融合。

⑤ロシア極東や中国東北地方の大学、研究機関との共同研究の新展開。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

①大西秀之、技術をモノ語る苦難と悦楽、文化人類学、77 巻 1 号、2012、pp.27-40 査読有

②思沁夫、“母鹿の歌”とエヴェンキ人の自然観、鄂温克研究 16 号、2012、pp.3-19、査読有

③SASAKI, Shiro、Voices of Hunters on the Socialist Modernization: From a case study of the Udehe in the Russian Far East. Inner Asia12(1), 2010, pp. 177-197、査読有

④田口洋美、狩猟文化研究：その百年の孤独、季刊東北学、23 号、2010、pp.173-205、査読

無

⑤佐藤宏之、地考古学が考古学に果たす役割、第四紀研究 48 巻 2 号、2009 年、pp. 77-83、査読有

⑥伊賀上菜穂、十九～二十世紀のロシア人農民の靈魂観：墓をとおして見た死者と生者の関係、アジア遊学 128 巻、2009 年、pp. 160-171、査読無

[学会発表] (計 5 件)

①佐藤宏之、黒竜江省赫哲族の民族考古学的調査、第 14 回北アジア調査研究報告会、2013 年 2 月 10 日、石川県立博物館

②SASAKI, Shiro、Maintenance of the Landscape under the Modernization: a case study of a subgroup of an indigenous people in the Lower Amur, Region, Siberia, Inland Sea in a Global Perspective: International Conference on the Archaeology, History and Heritage Management of Coastal Landscapes、17/March/2012、Leiden University, Leiden, Netherland

③ONISHI Hideyuki、Invention of Sacred Place in the Ainu Society: The Landscape Shift Caused by Japanese Colonial Development and Policies, Inland Sea in a Global Perspective: International Conference on the Archaeology, History and Heritage Management of Coastal Landscapes、17/March/2012、Leiden University, Leiden, Netherland

④ONISHI Hideyuki、The landscape shift in Ainu society caused by Japanese colonial development and policies、PECSRL (The Permanent European Conference for the Study of the Rural Landscape) 24th Session、24/Aug/2010、University of Latvia, Riga, Latvia

⑤思沁夫、“生存基盤”からエコロジーを問う、中国生態学会、2009 年 9 月 13 日、中国北京

[図書] (計 1 1 件)

①Аргудяева Ю. В., Хисамутдинов А. А. Из России через Азию в Америку: русские старообрядцы. Владивосток, 2013. 427p.

②高倉浩樹 (編)、佐々木史郎、池田透他、新泉社、極寒のシベリアに生きる—トナカイと氷と先住民、2012 年、272p.

③内山純蔵・カティリンドストロム (編)、佐々木史郎他、昭和堂、景観から未来へ (東アジア内海文化圏の景観史と環境 3)、2012 年、296p.

④内山純蔵・カティリンドストロム (編)、大西秀之他、昭和堂、景観の大変容 (東アジア内海文化圏の景観史と環境 2)、2011 年、294p.

⑤蓑島栄紀 (編)、佐々木史郎他、勉誠出版、アイヌ史を問い直す、2011 年、214p.

⑥JORDAN, P. (ed.), SASAKI, Shiro et.al.,

Walnut Creek, California: Left Coast Press、*Landscape and Culture in Northern Eurasia*、2011、358p.

⑦佐々木史郎・加藤雄三(編)、佐々木史郎、大西秀之他、有志舎、東アジアの民族的世界—境界地域における多文化的状況と相互認識、2011年、307p.

⑧菊池俊彦(編)、佐々木史郎他、北海道大学出版会、北東アジアの歴史と文化、2011年、606p.

⑨思沁夫(編)、内モンゴル自治区文化出版社、中国とロシアの間に揺れるアイデンティティ：ブリヤード人の昨日と明日、2011年、289p.

⑩岸上伸啓(編)、佐々木史郎他、明石書店、開発と先住民、2009、368p.

⑪岡洋樹・境田清隆・佐々木史郎(編)、高倉浩樹、伊賀上菜穂、思沁夫他、朝倉書店、東北アジア(朝倉世界地理講座—大地と人間の物語 2)、2009年、391p.

⑫加藤晋平先生喜寿記念論文集刊行委員会(編)、加藤晋平、佐藤宏之他、北海道出版企画センター、物質文化史学論聚、2009年、431p.

[その他]

ホームページ等

ロシア極東森林地帯における文化の環境適応(2009-2012)

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/21251013>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 史郎 (SASAKI SHIRO)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・教授

研究者番号：70178648

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

佐藤 宏之 (SATO HIROYUKI)

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究者番号：50292743

田口 洋美 (TAGUCHI HIROMI)

東北芸術工科大学芸術学部 教授

研究者番号：70405950

池田 透 (IKEDA TORU)

北海道大学大学院文学研究科 教授

研究者番号：50202891

高倉 浩樹 (TAKAKURA HIROKI)

東北大学東北アジア研究センター准教授

研究者番号：00305400

大西 秀之 (ONISHI HIDEYUKI)

同志社女子大学現代社会学部 准教授

研究者番号：60414033

思 沁夫 (Si Qinfu)

大阪大学グローバルコラボレーションセンター 准教授

研究者番号：40452445

伊賀上 菜穂 (IGAUE NAHO)

中央大学総合政策学部 准教授

研究者番号：10346140

(4) 研究協力者

安木 新一郎 (YASUKI SHIN' CHIRO)

大阪国際大学国際コミュニケーション学部 講師

根岸 洋 (NEGISHI YO)

青森県文化財保護課文化財保護主事

松森 智彦 (MATSUMORI TOMOHIKO)

同志社大学大学院文化情報学研究所

中村 和之 (NAKAMURA KAZUYUKI)

函館工業高等専門学校 教授

(5) 外国人研究協力者

アルグジャエヴァ Yu. V. (ARGUDIAVA, Yu. V.)

ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族

歴史学考古学民族学研究所 上級研究員

ベレズニツキー S. V. (BEREZNITSKY, S. V.)

ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念

人類学民族学博物館 上級研究員

ヒサムジノフ A. A. (KHISAMUTDINOV, A. A.)

ロシア連邦立極東大学 教授

クラージン N. N. (KRADIN, N. N.)

ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族

歴史学考古学民族学研究所 上級研究員

ラトウシュコ Yu. V. (LATUSHKO, Yu. V.)

ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族

歴史学考古学民族学研究所 上級研究員

ニキーチン Yu. G. (NIKITIN, Yu. G.)

ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族

歴史学考古学民族学研究所 上級研究員

サマル A. P. (SAMAR, A. P.)

ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族

歴史学考古学民族学研究所 研究員

黄 孝東 (HUAN XIAODONG)

中央民族大学・民族学・人類学研究科 博士後期過程

梁 松 (LIANG SONG)

中央民族大学・民族学・人類学研究科 博士前期過程

侯 儒 (HOU RU)

黒竜江大学